

# 伊勢崎銘仙 - 『織り上手を嫁にもらえ』は本当か -

## 伊勢崎銘仙の記憶を紡ぐ会

堀 芳枝・金井 珠代・金井 正明

昨年度の絹ラボ助成による研究を通して、伊勢崎銘仙に携わった織り子と職人らの聞き取りを行い、当時の女性たちの仕事と暮らしを明らかにした。今年度は聞き取り調査を継続し、伊勢崎銘仙の14以上もの複雑に分割された労働過程における男性と女性の分業を分析し、それをイラスト付きの冊子を作成することで、成果物としてまとめた。ただし、当初の目標であった、伊勢崎銘仙の産業圏の確定は資料不足のためできなかった。

伊勢崎銘仙は明治から昭和にかけて普段着、おしゃれ着として1930年には456万反生産された。当時の日本の人口が6,500万人であることから、女性の7人に1人が伊勢崎銘仙を着ていたことになる。伊勢崎銘仙の技法のひとつである「併用緋」は、複雑な手法を用いた色の鮮やかさとモダンな柄で一世を風靡した。現在古着業界でも特に注目されている。「併用緋」の複雑かつ多岐にわたる詳細な工程と、男性と女性がそれぞれどのように役割を果たしていたのかを考察した記録はない。そこで、本研究では、この複雑な労働過程における男女の役割を、聞き取りを継続することで、深めて行こうと考えた。当時の伊勢崎の産業構造を明らかにすることで、日本の近代化を支えた群馬県の絹産業が伊勢崎銘仙のような地場産業の学術的価値を高めることに貢献したい。

金井珠代、金井正明、菅谷奈保は2016年より伊勢崎銘仙の元織り子さんを中心に聞き取りを行ってきた。2020年より堀芳枝も加わり「伊勢崎銘仙の記憶を紡ぐ会」として、聞き取りを継続した。これまで聞き取りをした方々は延べ48人。ほとんどが大正末期から昭和10年代に生まれて、現在では85歳以上である。

そこで、今回は聞き取りや文献を通して、銘仙ができるまでの労働過程を明らかにした。伊勢崎銘仙はそのデザインとあでやかな色で「併用緋」が有名であるが、その工程の一例を図1のように示した。図1に示されているように、少なくとも18工程も

の分業から成立している。

図1は機屋といわれる織元を頂点にして、下職と言われた分業の製造工程の一例として示してある。伊勢崎の織物産業は工場による一貫生産ではなく、分業で支えられていた。群馬を中心とする北関東地域には、富岡製糸場という近代化された部門が輸出部門として日本経済を成長させ、日本の近代化、資本主義化に大きく貢献した一方で、伊勢崎銘仙のように農村の家内制手工業的な部門が地場産業として、残存していた。すなわち近代部門と伝統部門による「二重経済構造」であったことが理解できる。

この18の労働過程は、男女性別役割分

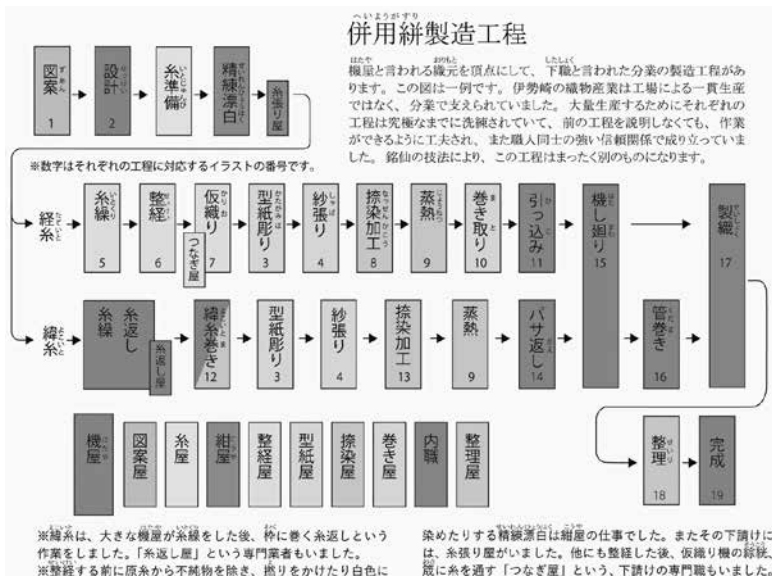


図1

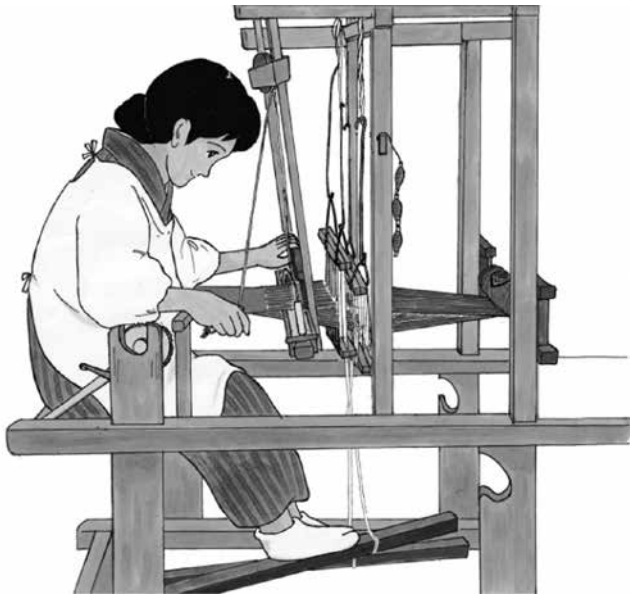


イラスト1

業で成り立っていた。この18の過程において、女性が集中していたのは、実際に機を織る図1の17番の「製織」の部門（イラスト1）である。本研究は当初、伊勢崎銘仙と女性をテーマにしていたこともあり、これまで聞き取りをした織り子さんは17人。彼女たちは子どものころから、母親が機を織る仕事を見て大きくなり、機織りの技術を見よう見まねで身につけた。機が織れるようになると、親に従って家族のために機を織った。彼女たちのほとんどは20代前半から29歳までにお見合いをして結婚した。彼女たちは嫁ぎ先でも機織りをしたり、和裁や洋裁の内職をしたりしながら何人もの子どもを産み育て、義父母や夫に従い、義父母や夫の介護や看取りもしていた。彼女たち

ちは幼少の頃から、母親や祖母らに「機織りができなければ嫁に行けない」と繰り返し言われ、機織りの技術を身につけた。10代から経験を重ねることで、織り手としては熟練の技術に達していたにもかかわらず、自分たちのやっていることは「誰でもできること」、「当然のこと」であると考えて機を織っていたことがインタビューからわかった。

聞き取り調査では「自分たちの世代はみんな苦勞をしている。自分だけじゃない」、「長女の自分だけが中卒で機織りをした。下の妹たちは高校まで出してもらい、自分は両親の本当の子供ではないんじゃないかと悩んだ」、「嫁つとめが辛くても、実家に帰ったら下の弟や妹がいるし、両親を困らせるだけ。親に頭を下げさせ婚家に戻るのはもっと辛い」など、苦勞話は枚挙にいとまがなかった。

機織りは出来高制で、出来上がった反物は自分たちで機屋に持って行くのではなく、「機し廻り」（労働過程15）（イラスト2）に渡した。織り賃は二反分（1疋）を1単位として支払われた。彼女たちは機織りをするための経糸の緒巻きと緯糸の認め束（かせのたば）もこの「機し廻り」から受け取っていた。この機し廻りは男性の仕事であった。未婚の織り子さんにとって、一番身近な異性がこの機し廻りであった。聞き取り調査では、この男性にひそかに憧れたり、恋愛対象になったりしていたことがわかった。こうしたほほえましいエピソードがある一方で、反物を売ったお金は、娘時代は親に、嫁いでからは義父母にほとんどを渡すという回答が多かった。娘時代に小遣い稼ぎで機を織り、映画などに行ったという話は1人しか聞けなかったが父親が反対して断念した。機織りという熟練の技術を持ちながらも、経済的に自立するという選択の余地のない、この女性たちの構造をどのように理

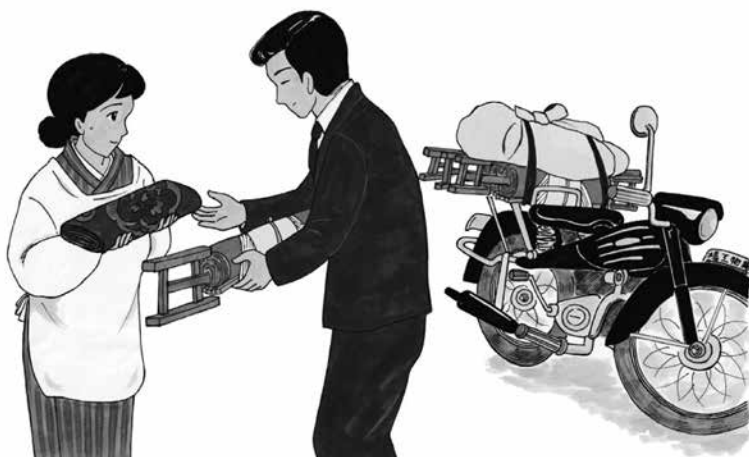


イラスト2



イラスト3

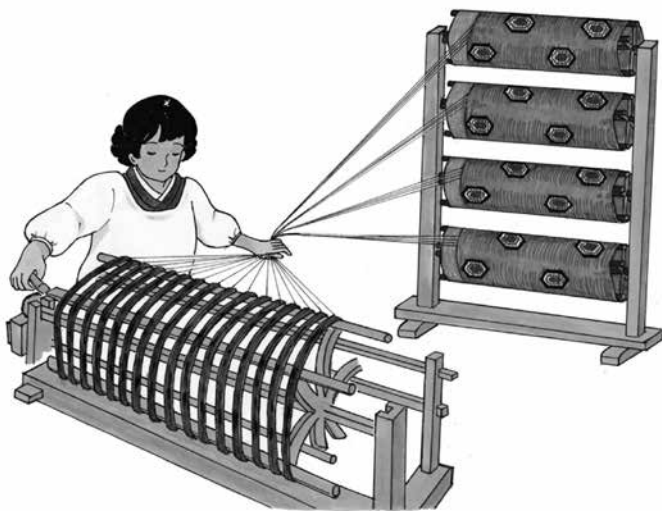


イラスト4

解するのか。今日に通じる日本女性の課題である。

機し廻りの聞き取りは4人おこなった。自転車で利根川をわたり、本庄から岡部、熊谷にまでその営業範囲は及んでいたようである。坂東大橋近くの織り子の家を「ステーション」と呼んで中継地をつくり、時間がある時に糸を運んでいた。昭和中期、オートバイの普及によって、より遠くへの営業が可能となった。

18の工程の中で女性の労働は、機織りの前後で、糸に直接触れる仕事に集中していたようである。たとえば、図1の11番の「引っ込み」（イラスト3）の綜統通し、箆通しはお年寄りもふくめて女性が「内職」していたようである。綜統通しとは、緒巻きになった経糸を織機で織るために、1本1本綜統に、箆の目には二本一緒に通す作業である。この作業を「引っ込み」と言う。1,200本以上ある経糸すべて、順番を間違えずに通さないといけない。とても細かい作業である。出来上がった緒巻きは、機屋に戻されたあと、機し廻りによって織りさんに届けられる。

女性の内職という意味では、図1の14番の工程の「パサ返し(またはバサ返し)」（イラスト4）も同様である。この作業は新聞紙に巻かれて乾燥した緯糸を、16

本の総に分ける作業である。この総のひとつが型紙1柄分の緯糸になる。パサ返しという名前の由来は、糸の巻取りが少なくなると下地の乾いた新聞紙がパサパサ、バサバサ音を立てたからだという。

パサ返しの聞き取りは2人行った。ひとは父親の死後、母親がパサ返しを一手に引き受けて、子ども4人を育てたという。聞き取りを行ったのは長女だったので、彼女は中学卒業後、母親とともにパサ返しをして家計を助けたという。

パサ返して総になった緯糸は織機にかけるために、竹管に巻かなければならない。この作業は工程 図1の16番の「管巻」（イラスト5）である。管は織機のシャトルにつけられ、綜統で上下に分けられた経糸の間を往復して布になってゆく。管は小さく1柄分の1総が1度に巻けないので、4～6本の管に分けて巻く。管の順番が狂うと柄にならないので、細心の注意を払う必要があった。管巻は普通織り子自身で行うが、急ぎの仕事や効率を考えて、義母やほかの家族が行うこともあった。管巻は家の中で行うため、機織りや家事に忙しい女性を見かねて、父親や夫もすることがあったという。

女性が多くかかわった工程にはもうひとつ、図1の18番の整理屋（イラスト6）の工程がある。これは織り上がった反物を最終的に商品にするための工程である。反物を水で洗って乾燥させ、幅揃え、艶出しなど



イラスト5



イラスト6

を行う専門業者のもとで、女性たちは出荷用に1反ごとに畳んだり、ラベルをつけたりするなど補助的な仕事をしていたと考えられる。

女性たちの仕事は他にも、工程5番の糸繰りをおこなって経糸をつくる（整経）、工程4番の型紙に漆で絹紗（きぬしゃ）を張る男性の職人たちの補助として、職人の母親や妻が紗張りや繋ぎ取りなど細かな作業を行っていたようである。いずれにせよ、男性の補助的な作業であった。

銘仙の作業工程を分類してわかったことは、18工程の中でも銘仙の図案やデザイン、企画、生産管理や営業などいわゆる「川上」の部門に男性の労働が集中し、実際に銘仙を織って商品にするための「川中」の部門に女性の仕事が集まっていた点である。今回の研究の射程にはなかったが、伊勢崎から百貨店まで銘仙を卸す流通や百貨店での販売など、いわゆる「川下」の部門の分析は今後の課題としたい。

本研究では伊勢崎銘仙の併用緋の労働工程を聞き取りや文献を通して明らかにした。伊勢崎銘仙がつくられる過程は少

なくとも18にもおよび、機屋と呼ばれる織元を頂点に、下職と言われた分業が、男女性別役割分業にもとづいて行われていたことがわかった。こうした分業によって、農村の前近代的な家内制工業でも大量生産が可能であったと考えられる。また、前の工程を説明しなくても、作業が滞りなく進むように作業工程が工夫されていただけでなく、職人同士の強い信頼関係も重要であったと考えられる。

最後に、本研究の最初の問いである「伊勢崎銘仙—『織り上手を嫁にもらえ』は本当か？」についてであるが、この生産過程の末端の単位を「世帯」と考えると、嫁が銘仙を織ることができれば、世帯に副収入が発生する。銘仙の中でも併用緋などより複雑で技術の高い反物をつくれれば、それだけ織り賃が高くなる。しかも、当時の嫁たちはそれを自分の労働とみなさず、労賃を主張しないため、義父母にとっては「都合が良かった」のだ。労働契約のない家庭内の労働は、労働とみなされない空気が、この地域にあり、当人たちもそのことに気づかずに過ごしていたことが、聞き取り調査でようやくわかった。したがって、「織り上手を嫁にもらえ」は本当なのだろう。2023年、日本のジェンダーギャップは125位でG7の中では最低である。この数字の意味するところは、日本の女性は男性と同じように教育を受け、健康で長生きであっても、経済的には自立できずに、物事を決める意思決定からは排除されている、ということである。銘仙の労働過程をひとつ取ってみても、女性の置かれた立場は、今もあまり変わっていないといえよう。



## ■参考文献

小林吉太郎 『写真集 ねんねこ絆 空っ風』(スタジオ90・平成9年)

伊勢崎織物同業組合 『伊勢崎織物同業組合史』(伊勢崎織物同業組合・昭和6年)

伊勢崎織物協同組合 『伊勢崎織物史』(伊勢崎織物協同組合・昭和41年)

伊勢崎織物協同組合 『伊勢崎織物組合百年史』(伊勢崎織物協同組合・昭和58年)

日本絹の里 『伊勢崎の織物展』(日本絹の里・平成12年)

愛知県美術館・毎日新聞社 『杉浦非水 時代をひらくデザイン』(毎日新聞社・令和3年)